様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月　７日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2010
課題番号：20720027
研究課題名（和文）　東アジアにおける仏教美術の伝播について―供養者像に注目して―

研究課題名（英文）　Study on the Spread of Buddhist Art in East Asia: Focusing on Images of Worshippers

研究代表者
小野　佳代（ONO KAYO）
早稲田大学・高等研究所・研究員
研究者番号：60386563

研究成果の概要（和文）：
本研究の目的は、飛鳥時代の美術作例中にあらわされた“供養者像－手に供物を持って跪く－”に注目することによって、中国から朝鮮半島を経て日本に伝播した仏教がいかなる様相で日本に受容されたのか、その実態を明らかにすることである。中国、韓国、日本において実地調査を行ったところ、中国の仏教徒（俗人供養者）たちがインド由来の「跪く」姿勢を自らの供養法として受け入れたのは、中国・南朝の方が北朝よりも早く、その供養者の図像が朝鮮半島の百済、そして飛鳥時代の日本へと伝播したと考えられた。

研究成果の概要（英文）：
This research aimed to consider how Buddhist art propagated to Japan from China via Korea, by focusing on images of worshippers kneeling with offerings in their hands. By surveying such images in Japan, Korea, and China, one was able to reach the conclusion that most likely, Buddhists in China's Southern Dynasty accepted the "kneeling" posture -originating in India- as their worshipping rite, prior to the Northern Dynasty, after which the images traveled to Baekche 百済 in the Korean peninsula, and then to Asuka 飛鳥 period Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
20 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
21 年度	700,000	210,000	910,000
22 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：美学・美術史
科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史
キーワード：東アジア、仏教美術、供養者像、伝播、香炉、跪

１．研究開始当初の背景

飛鳥時代（6～7 世紀）の仏教美術の源流については多くの研究があるが、未だに一致した見解は出されていないのが現状である。というのも中国・南北朝時代の仏教美術はほとんどが破仏によって失われており、唯一のまとまった遺品は北朝側の石窟寺院にしか残らなかったからである。こうした現状から明治時代に平子鐸嶺が飛鳥仏の止利式仏像の源流を北朝の龍門石窟に求めて以来、‘モノ’を重視する美術史の分野では飛鳥仏の源流を北朝側に求めるのが定説となっていた。この定説に異を唱えたのが吉村怜氏で、日本に仏教をもたらしたのは百済であり、百済は南朝国家としか国交がなかったことを文献史学によって実証し、さらに蓮華化生という図像例をもって飛鳥仏の源流が南朝側に求められると主張した（吉村怜「止利式仏像の源流」）。しかし南朝側に豊富な実作例がないことから、学会の定説を覆すには至っていない。そこで本研究は、中国、韓国、日本に現存する“供養者像”という新たな視点から、仏教美術の伝来ルートを検証しようと試みる。

２．研究の目的

本研究の目的は、飛鳥時代の美術作例中にみえる供養者像－手に供物を持って跪くーに注目することによって、中国から朝鮮半島を経て日本に伝播した仏教が、いかなる様相で日本に受容されたのかを明らかにしようとするものである。

美術史において供養者像とは、本尊（仏陀）を供養讃嘆する脇役的存在であることから、従来供養者像に注目した研究はほとんどなかった。しかし供養者像とは仏像・仏画など美術作品の注文主（発願者）であり、また寄進者でもある。こうした作品を生み出してきた主体（供養者）に注目することにより、各時代を生き抜いた仏教信者たちの信仰形態が見えてくることも少なくない。そこで本研究では、東アジアに比較的作例の残る供養者の図像に着目し、東アジアにおける仏教美術の受容と伝播の実態を明らかにしようと試みる。

３．研究の方法

仏教美術の伝来ルート（中国―朝鮮半島―日本）を解明するために、つぎの三つの問題に注目する。まず第一は、中国から朝鮮半島への仏教美術の伝播の問題であり、第二は朝鮮半島から日本への仏教美術の伝播の問題、第三は日本における供養者像が中世以降どのように展開して行ったかという問題である。これらの問題を、実地調査や関連文献の解読を通して解明していく。東アジア地域における供養者の図像の比較が鍵になるので、出版物からの図像収集はもちろんのこと、中国・韓国・日本における現地調査を実施する。さらに文献学的研究を通して、仏教美術が伝播した歴史的な背景も探りたい。

４．研究成果

１）中国から朝鮮半島への仏教美術の伝播ルートを探るために、朝鮮半島に分布する供養者像の図像収集を行った。すなわち三国時代(高句麗、百済、新羅、4-7 世紀)の供養者像を中心に、統一新羅までの図像の収集を行った。2008 年、新羅のかつての都・慶州の石窟庵、仏国寺、国立慶州博物館などを訪れ、実見・調査も併せて行い、図像収集に努めた。図版等も含めて確認できた慶州での事例は、塔谷磨崖彫像群と断石山神仙寺磨崖仏像群である。前者は高さ約 10 メートルの岩の四面に、仏塔、菩薩、天女、三体仏、仁王像、石仏、石塔、修行僧など

と共に、花を捧げる供養僧を彫出しており、後者はＬ字型に削られた岩壁に、多くの仏像を彫出したもので、約 7.5 メートルの弥勒仏の近くに手に供物を持った供養者像が彫られていた。この供養者像は古新羅の服装を身にまとっている点に特徴がある。このほか、統一新羅のものでは、如来像の台座の八角中台石に供養者や供養菩薩等をあらわす例があった(宝物第 542、541、424、371、220、492、436 号他)。韓国において、古い時代の作例は予想以上に少なかったため、今後も引き続き図像収集を継続したい。

２）韓国百済の故地（扶余、全州、益山など）の仏教遺跡と博物館を訪れ、出土品等の調査を行った。菩薩像では、両手で宝珠を捧げ持つ点などに飛鳥仏にも通じる特徴がみられたが、問題とする供養者像の作例は少なかった。さらに中国では山東省済南市の博物館を訪れ、仏教遺品の調査を行ったところ、北魏時代の石造仏三尊像の台座に、「跪く」俗形の供養者像を見出すことができた。こうしたインド由来の「跪く」礼法を、僧形以外の俗人の姿勢にまで採用するようになるのは、龍門石窟では初唐時代になって顕著にあらわれてくる特徴である。一方、南朝では、個人礼拝型の貴族仏教が行われ、仏教徒たちの一般的知識や宗教的教養も高く、出家者とそれほど差がなかったことが仏教史の方面から指摘されている。この点を踏まえると、南朝では唐代を待たずとも、インドに由来する新しい礼法が一般の信者の図像にも採用された可能性が考えられる。ひるがえって山東省の作例において、初唐以前の俗形の供養者像の姿勢に「跪」が採用されているのは大変に注目される。山東省においては、いち早く南朝の影響が及んでいた可能性があり、それゆえに北魏時代の俗形の作例に「跪」が採用されたのではないだろうか。

３）中国・台湾の国立故宮博物院所蔵の①北魏太和元年（477）銘の金銅・釈迦牟尼仏坐像のほか、国立博物館所蔵の②北斉武平七年（576）の張解等造仏七尊像碑、および③唐咸亨三年（672）の仏造像碑についても実地調査を行った。まず①の北魏の作例では、台座の正面と側面に供養者があらわされていたが、光背つきの人物（僧か）の場合には跪く姿勢を採用し、一方、冠を着けた俗人供養者の場合には立像形式であらわされていた。俗人か否かによって姿勢を作り分けていたのは大変に興味深い。また②の北斉の作例では、石碑の下方に造像者の張解とその妻の姿が刻まれていたが、二人とも手に供物を執り、跪く姿勢であらわされていた。③の初唐の作例では、石碑中の仏龕の下方に複数の供養者たちを刻むが、ほとんどが跪く姿勢で表現されていた。

仏教における「跪」は、先述のとおり本来インドにおける礼法である。中国に仏教が伝来して以後、「跪」は供養菩薩や天人などの姿勢として多用され、また光背を伴う僧侶の姿勢にも用いられていった。ところが、肖像性のある俗人供養者をあらわす際には立像形式とすることが多く、北朝末から初唐以降になってようやく俗人供養者の姿勢にも「跪」が積極的に採用されるようになっていった。俗人供養者にとっての「跪」は、仏教受容期において、インドの礼法たる「跪」でははく、卑者の坐法「胡跪」として認識された可能性が考えられる。ところで中国・南朝では、仏教徒たちの宗教的知識や教養が北朝に比べて高かったという。仏教徒たちが跪く姿勢を自らの供養法として取り入れる過程は、南朝の方が北朝よりも早かったと考えられる。日本の飛鳥時代の作例中に供物を持った「跪く」俗人の姿が見出せる事実は、中国南朝の美術を受け入れた可能性が高い。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

①小野佳代、奈良・来迎寺の善導大師坐像の造立背景―結縁交名を手がかりとして―、早稲田大学高等研究所紀要、査読無、第 2 号、2010、pp. 1-8

〔学会発表〕（計２件）

①小野佳代、奈良・来迎寺の善導大師像の制作背景―結縁交名を手がかりとして―、美術史学会東支部例会、於東京大学、2010 年 3 月 27 日

②小野佳代、臨終の場面で生じ「香」について―その多様な役割と意味―、第 123 回早稲田大学奈良美術研究会、於早稲田大学、2009 年 4 月 16 日

〔図書〕（計２件）

①小野佳代、他、勉誠出版、アジア遊学 115 縁起の東西、「仏教における「香」と奇跡」（分担）、2008、224、pp.158-166（担当）

②小野佳代、他、勉誠出版、藤巻和宏編・聖地と聖人の東西－縁起はいかに語られるか－、「懺悔の肖像－奈良来迎寺の善導大師坐像をめぐって―」（分担）、2011、頁数未定

６．研究組織

(1)研究代表者

小野佳代（ONO KAYO）

早稲田大学・高等研究所・研究員

研究者番号：60386563